あの時、
あの頃の
小高を
語り継ぐ。

小高の人々28名へのインタビュー

おだかのあかりアーカイブ・プロジェクト 報告会

撮影・編集・監督：すぎた和人／ピアノ演奏：吉津恭子

＊前半あるいは後半、全編でも、お好きなタイミングで、ご入場いただけます。

「震災篇」上映:13時～/トーク14時半～/「生活篇」上映:15時半～

2023年 3月25日(土) 13～17時／入場無料

＊感染症対策にご協力ください。

会場:小高生涯学習センター「浮舟文化会館」ホール

共催:希来基金・福島大学地域未来デザインセンター福島復興学研究会　科研費

ゲスト登壇者:山川充夫(福島大学)・益邑明伸(東京都立大学)・前川直哉(福島大学)

問い合わせ:希来基金 代表 小林友子 090-5807-3212　制作:スタジオ・サードアイ

＊「おだかのあかり」22年度のインタビュー活動は中日新聞 東日本復興支援事業助成金、報告会及び記念誌作成は福島大学地域未来デザインセンター福島復興学研究会・日本学術振興会科学研究費助成事業の協力により行っています。

予告編映像

おだかのあかりアーカイブプロジェクトを皆さんと

あの時から13年目、小高の町に戻って来た人たちが生きて来たこれまでの人生を語った映像を、皆さまと一緒に観て感じ合えればと思います。

２０１１年から1年間、自分の家に帰れず、'12年になっても住むことが叶わず、片付けても片付けても住むことが叶わず、仮設住宅から我が家に通い続けても住めず、'16年まで待つ事になり、帰ることも叶わずに逝ってしまった人たちの思いを、私たちは届けたい。小高で生きて来た証も。

あの時、通行証を車に付け、真っ暗な家々が立ち並ぶ、20キロ圏内避難区域の国道6号線を走り小高に戻ると、信号機の点滅だけが誰もいなくなった町を照らし出していた。'15年から準備宿泊が始まり、家の明かりが付き始めた。あ、あの家の明かりがついたと。そんな体験をしてきた私たちの証言を観て聞いて下さい。

希来基金 代表 小林友子

——地元の人っていうか、家を片付けるとかで来て、食べるところがないからって「おだかのひるごはん」に行ってご飯食べる時に、そこは誰かに会えるって、ここに来たら誰かに会えるよねって言われるのが凄く嬉しかった。地元に前は居た人が、みんなばらばらになって。ほんとに、ここが地元の一番最初の店なんだって思うとさ。

（渡辺静子さん）

——（警戒区域期間中も）何回かこっちに戻って。でも、ほとんど畑なり梨畑が荒れていく状況だったので、農家やってた私たちとしては、涙ながらにね。本当だったら嬉しいはずなのが、本当に悲しい戻りを何回かやりました。

（横田のバラ園・横田芳朝さん）

——小高は、皆さん、割と戻って来てらっしゃるのは、地域性、今まで築き上げてきたものが土台にあるからだと思います。

（同慶寺・田中徳雲さん）

——本当にみんなここで商売してた人は、特にそうだよね。ここでしかできない商売ってあるじゃない？　学校の先生だったら、他の学校に行けばいいよ。だけど、お店やってる人って、ここで商売してる訳だから。

（西屋・西 佳代子さん）

——店がないと、やっぱり役に立てないんですよね、思うように。店があれば、もう少しお役に立てるのかなと思って。

ここを開店した後、「どうして小高で？」っていうふうなことを何度も訊かれましたけど、元々ここでやっていたことなので継続したいというね……普通に（続けたい）、と思って始めています。

（鍋屋・橘 由美子さん）

——子供の頃はもうそれこそね、シジミもいたし。夏休みは、ＰＴＡの人たちが川を堰き止めてくれて、そこで遊んでましたし。あの頃、夕方、川を散歩してるとウナギが泳いでるのが見えたからね。

（ＫＡＯＮ／佐藤有さん）

——みんな集まって機械の点検・整備をしたりね。そんなことをやってた、本当にいいとこだった。今でもあの仲間ともう一回仕事してみたいと思うね。

（半杭一成さん）

23年度も小高の人々にインタビューをし続けてゆきたいと思います。皆さまにご協力をお願い致します。（希来基金）